

日本美術略史の謎

森 仁史

た在庫していた肖像画類も焼失したものと思われる。その中で、『大久保利通像』の原版は奇跡的に難を免れ、当時宮内省に保存されていた『明治天皇御軍装』の原版共々、今も現存している。

その後『大久保利通像』は、この残された原版によって、例えば一九九〇年八月に開催された『キヨツソナーと近世日本画里帰り展』（東京日本橋・高島屋ほか）の折に、その催しの一環として再刷されて即売されたという。あるいはこれ以前にも非公式に刷られた機会があったかもしれない。しかし、原版の形状は肖像部分と文字部分が一版から出来ており、印刷した場合に、当然、文字部分の刷り込まれたものである。それにまた経年による版の痛みによって、大きな版をむらなく均一に印刷するのは難しいのが現状だという。

今回、筆者が手にした『大久保利通像』をどのように位置付けしたらよいか、はなはだ迷うところである。最も合理的な考えは、先述したように、薄い和紙を使用していることや、文字部分が見られないこと、刷りむらのない鮮明な印刷状態などから判断して、肖像部分の銅版が完成した時点で試し刷りを行なったもの、そしてその一枚が、何らかの事情でこのような形で今日まで残されたのではないかと、いうものである。あるいはこのように考えるのは、とかく古きを求めたがる牽強付会的な収集家心理であろうか。

今回のキヨツソネに関しては、切手・紙幣印刷研究家の植村峻氏から御教示を賜った。

近代日本美術史を語り始めると、その美術史なるものの嚆矢として明治三十三年（一九〇〇）のバリ万博の日本出品に合わせて出版された『校本日本帝国美術略史』なる著作を知ることになる。しかし、古書としては何種類ものほぼ同名の図書を目にし、見るたびに混乱させられるのは筆者ばかりではないだろう。また、この書名が知られている割には、その流布、出版事情は余り語られていないように思うので、最近入手した出版案内で述べられている事情を含めて、それを略述してみたい。また、この著述のその後の顛末についてもいささかの私見を披瀝しておきたい。

明治の日本美術は国家の近代化の進展に合わせて、一方で近世の工芸的世界から新しい像を糾つていこうとしていたし、他方では進出するべき海外に向けて自己正当化と存在アピールを図ろうとしていった。時間的には前者から始め、次第に後者に移行していったといえる。明治初期の試行期を終え、制度の創設や指導理念の確立を経て、そのひとつのピークが一九〇〇年バリ万博であった。こうした事業は実はずでに歴史叙述において先行して進められていた。明治十年バリ万博出品に当たって、臨時博覧会事務局は太政官修史館に国史四巻を編纂させ、出品した。これは中国から分離された日本一國史の成立の重要なステップとなり、更に大幅な補充を経て明治二十三年に重野安繹・久米邦武・星野恒編『校本國史眼』六冊として上梓された。この史書は冒頭に天皇継統表を掲載し、この後に皇國史観の骨格が形作られる上でも重要な出発点となった。

同様に、そもそも「日本」美術史が意識されない近世的な美術思考から、インド、中国の美術を継承する日本美術への跳躍という強烈な自意識が岡

倉天心の日本美術史の主要な動機であったことは既に木下長宏氏によって論じられてきたところである。この日本美術史編纂の中心であった岡倉は直前の明治三十一年三月に帝室博物館美術部長を罷免され、東京美術学校校長を追われてしまったので、替わって執筆の中心となったのが福地復一で、紀淑雄と協力してこれを完成させた。

明治三十三年パリにおいて万博が開催され、M・トロンコフの翻訳によるフランス語版『日本帝国美術略史』がパリで刊行された。この本の日本語版と称するものが農商務省によって印刷された。これらを列記すると次の通りである。

① (Histoire de L'art du Japon) Paris, Maurice de Brunoff, 1900. B4, xv, 277. 3p. illust. 73 pl.

② 『稿本日本帝国美術略史』明治三十四年、農商務省。二七四ページ、図版三三三枚

③ 『日本帝国美術略史稿』明治三十四年、農商務省。四一〇ページ、図版なし

この三種類の刊本は発行部数が少なく、国内の一般美術愛好者に十分に行き渡らなかった。これに着目して、『日本美術』誌の川崎安(原安民)は帝室博物館にその再刊復刻の認可を得た。その際に、「建築之部」の執筆を伊東忠太に依頼し、これを補充して追加した。しかし、発売にこぎつけたところで隆文館にその一切を委託せざるをえなくなってしまった。この時期に発売されたのは日露戦後の昂揚した国民意識と無関係ではなかったであろう。また、隆文館は販売に当たって、市場性を考慮して三種類の装丁と英語版を用意し、かなり大掛かりな出版計画を実現した。同社はこの後更に、大正元年と五年にその再版を出版された。それらの概略は次の通りである。

④ 『稿本日本帝国美術略史』明治四十一年、日本美術社(隆文館発売)。

三二八ページ、表紙背本羊皮、図版三六八、版画五葉

⑤ 『稿本日本帝国美術略史』明治四十一年、絹表紙、日本美術社(隆文

館発売)。二九一・三六六ページ、コロタイプ挿図三六八、版画五葉

⑥ 『稿本日本帝国美術略史』(縮刷版)隆文館、大正元年。三五四ページ、図版三六八

⑦ (History of The Japanese Arts), 1907 Tokyo, The Ryubun-kwan Publishing Co.

⑧ 『稿本日本帝国美術略史』(縮刷版)隆文館、大正五年。菊判、四八四ページ、写真網版挿図三六八

ここでこれらの叙述の内容に立ち入ったのでは長くなるので、いずれ改めて論ずることとし、二、三の事実を指摘しておくに留めたい。最初に書名であるが、明治三十三年に発表されたときから、国内と海外では書名は大きく異なっている。海外版は岡倉や九鬼隆一らの日本美術の意義を世界に認めさせようという気宇壮大さを最初から避けているように見うけられる。日本語版では、いずれも内容編成は序論と初期の美術から江戸時代までの三編十章立てとなっており、各章は原則として当代美術に及ぼせる社会の状況・当代美術の変遷に始まり特質・絵画・彫刻・建築・美術的工芸の順序で叙述されている。④以降では建築之部は巻末に独立して掲載され、仏教渡来以前から江戸時代までを時代順に八章に分けて叙述している。しかし、①-③は六部十章編成から成り、各章は当代美術にみる社会情勢、当代美術の性格と発展、絵画、彫刻、建築、美術的工芸に分けて叙述されている。建築の叙述が明らかに異なっている。この日本美術社は大正の頃には雑誌だけでなく、黒田鵬心の趣味叢書の発行元になったり、金工製作所を経営したりしている。

この日本で最初とされる美術史と極めてよく似た題名の本を古書市場でよく目にするところがある。筆者などは同じ本の改装再版かと思っただけである。しかも、それは戦前だけでなく戦後版もあるのだ。

⑨ 帝室博物館編『日本美術略史』便利堂、昭和十三年。一九〇ページ＋図版一三〇

⑩ 帝室博物館編『日本美術略史』(縮刷版)便利堂、昭和十五年。二五



③



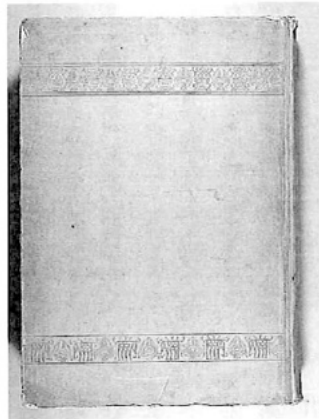
②



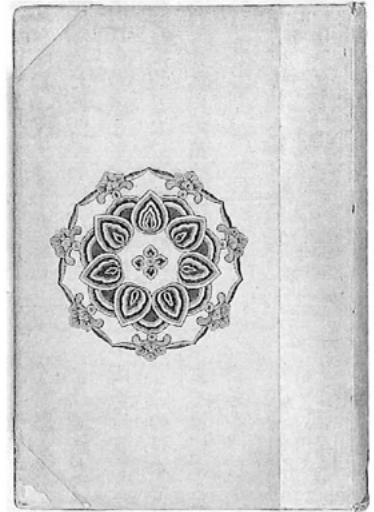
①



⑧



⑤



④



⑦



⑨



⑪

⑩

二ページ十図版一三〇
 ⑪国立博物館編『日本美術略史〔改定新版〕』便利堂、昭和二十六年。
 二五〇ページ十図版一三〇
 昭和三年昭和天皇が即位し、翌年に大礼記念帝室博物館復興翼賛会が結成され、七百万円の醸金が集められ、十三年には渡辺仁設計案に基づいた復興博物館が竣工した。現在の東京国立博物館本館である。この年の紀元節に⑨が刊行され、紀元二千六百年にその縮刷版⑩が刊行された。これは何度も版を重ね、筆者の手にあるものも美術書院刊行の昭和十八年の第

『日本美術略史』の諸本
 (丸番号は本文の数字)

四版である。

明治三十二年の序論ときわめて似た序論に始まり、美術史の叙述は上古から江戸時代までの九章に編成され、各章は時代概説・絵画・彫刻・工芸・建築から成り、構成も殆ど変わっていない。末尾には大量のコロタイプ図版を添えている。四十年余りを経て「新たに日本美術略史を編纂し」たにしては、ちと前轍を踏襲しすぎているように思われるが、どうだろうか。

さらに、戦後改定版は写真で見えるように版型だけでなく、⑨の叙述の章立て構成を全く変更していない。また、口絵も同じなら、図版も同じで、表紙の型押しまで全く同じくらいである。ただ、⑨、⑩が布クロスなのに⑪は紙になっている。戦前版と戦後版の目次を見比べても、違いは各章のページの数字くらいしか見つけられない。

さすがに文化国家日本はすでに戦火を交える前からその美術の真価を見極めていたので、殆ど美術史の叙述に変更を加える必要にない程であったのだろう。一応念の為に何が変わっているかを見ておくと、「国体の光輝ある特殊性」や帰化人美術家についての叙述の一部変更の他には、杉栄三郎総長による序が戦後は省かれていただけであった。その書き出しは、「日本帝国は肇国以来茲に三千載、儼として金甌無欠の国体を擁し、いまだ嘗て外侮を受けず国威国光宇内に震耀せり」とあったので、さすがに事実と食い違ってしまったので、改定新版にしなくてはならなかったのだろう。それにしても、サンフランシスコ講和条約の締結と同月に出版したりするのは国立博物館としては少々内弁慶すぎるのではないだろうか。正しいものは正しいのだから、マッカーサーのいるうちに日本美術の真価を教えてあげれば良かったのではないだろうか。

ともかくも、明治三十三年以降戦後に至るまでに天心の意思に反して美術教育がすっかり洋風化されてしまったのに対して、美術史叙述の彼の事跡がこのように長く影を落としたことは、天心にとって幸福なのであろうか。

お札博士スタイルの記6 古本歩き・横浜の巻Ⅶ

山田 俊幸

前回では息子「竹内久一」の逸話を書いたので、それとまぎらわしく、ちよつとごちゃごちゃしてしまうけれど、ここではまた大曲駒村（くそん）の研究によって「田蝶（芳兼）」の逸話を書く。

駒村は田蝶の話や竹内久雄というこの時期の当主（昭和の初めの当主で、田蝶の孫に当たる）に求めたが、いずれにしても明治初期に活動した祖父のこともあり、久雄の話からは「遺憾ながらそれ等は一つも得る処がなかつた」と言う。そこで久雄から一人の老人を紹介してもらうことになる。それは「故人に生前面識ある筈と云ふ」人物で、大井町に住む弥石寛七郎老というのがその人だった。「弥石老は浅草公園に居た一光斎正木芳盛に就いて、浮世絵を学び、曾ては盛満と云ふ画名もあつた人、（略）浅草吾妻橋際の提灯屋美濃屋事松浦銀次郎と云ふ人の細君の弟に当り、一度は同家に手伝つて居た事もある関係で、よく田蝶の事を知つて居り、快く筆者を引見して知つて居るだけは話して呉れた」。それはこんな話だった。

美濃屋の家は、吾妻橋際とは言つても今の東京亭のある隣でして、田蝶翁の竹内家とは姻戚の間柄でもありませんし、また姉の嫁いだ先の松浦の婆さんという人が無類の音曲好き、そこへきて田蝶翁の御家内のお豊さんが二弦琴に堪能とききます、そんな関係から、私はよく美濃屋に入りしていたので、田蝶翁の姿は始終美濃屋で見ました。体つきは息子の久一氏のように堂々としていて、それよりももう少し肥満していましたが、そのわりには人との話では声が小さく、穏やかすぎるくらいです。悠々迫らないというふうでした。なかなか滋味のある話もし、それに諧謔もあそんで、よく人を笑わせていました。

一寸

第七号 二〇〇一年七月

新・旧刊案内7

近代日本美術史研究の歴史を論ず

青木 茂

第七号目次

新・旧刊案内7

近代日本美術史研究の歴史を論ず

青木 茂 1

明治初期から中期にかけての木版整版和装本
出版に関する事について

岩切信一郎 4

残されたひとやま《アドバルーン》
―藤牧版画の後摺りについて5

大谷 芳久 8

目録にない図画教科書(七)

金子 一夫 12

仙石喜佐吉『小学画学本』(明治十三年)

高見堅の回文

丹尾 安典 15

二枚のキヨソネ作《大久保利通像》から

森 登 18

銅・石版画遺聞7

日本美術略史の謎

森 仁史 22

お札博士スタイルの記6

山田 俊幸 25

古本歩き・横浜の巻Ⅶ

■この同人誌前号に法螺を吹いたため、大袈裟なタイトルになった。致し方もない、羊頭をかかげて狗肉を売ろう。とはいえ、犬の肉の旨さを知らない人に羊の肉の味が分かるのであろうか。

■近代日本美術の研究は
・隈元謙次郎『明治初期来朝伊太利亜美術家の研究』昭和十五年十一月、三省堂
・西村貞『日本銅版画志』昭和十六年四月、書物展望社
・土方定一『近代日本洋画史』昭和十六年五月、昭森社
・森口多里『明治大正の洋画』昭和十六年六月、東京堂

の四冊によって、その研究が面白くて大切なものであり研究の対象となり得ることを、多くの人がびとが始めて知ったのであった。この四冊は関東震災後の明治文化研究の高揚から派生したものであつたが、特に隈元・土方の二著は書名からしても内容からしても新鮮であり、新分野の調査・研究に若い研究者(がもしあれば、そ)の心を奮立たせた著作であつたと僕は思っている。もう一冊個人作家研究を挙げるならば
・土方定一『岸田劉生』昭和十六年十二月、アトリエ社
であろう。(アトリエ社のこのシリーズに森口多里『中村彝』、今泉篤男『前田寛治』があるが僕は採らない)。

■この四冊または五冊に触発され誘発されて刊行された図書で、出版統制と太平洋戦争が厳しさを加え敗戦に至る昭和十八年―二十年の間に出版された美術図書を列挙し、時に僕の美術史学的感想を述べておきたい。もち